

2010 KAIST—大阪大学交流シンポジウム 奥池ロッジにて

2010年7月22日から24日まで、奥池ロッジ（芦屋市）にて”2010 KAIST - Osaka University Graduate Students Symposium in Biotechnology”を開催した。本シンポジウムは本専攻と、韓国のKAIST（韓国科学技術院）との間で2年に一度行われている大学院生の交流イベントである。双方の大学が交互にホスト校となり、大学院生を中心とした研究発表会と交流活動を2泊3日程度の日程で行っている。第9回目の開催となった今回は、組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院GP）「国際連携大学院FDネットワークプログラム」と本専攻生物工学コース同窓会「尚醸会」の支援を受けて大阪大学がホストとなり開催された。本研究科博士後期課程1年の上原了君と博士前期課程2年の横山光士君の2名を学生代表として、また、世話人として金谷茂則教授と松本玲子氏、古賀がシンポジウムを準備した。KAIST側はKim Hak-Sung教授、Seo Yeonsoo教授と生命科学系の各研究室から1~2名の大学院生あわせて21名、阪大側も世話人の他、生物工学コース各研究室から博士前期課程2年生を中心に大学院生が17名参加した。

プログラムは奥池ロッジに全員が泊まりこむ合宿形式で1日目から2日目の昼にかけて双方36名の学生による研究発表会、二日目の午後からは交流活動として、白鶴酒造と相楽園の見学や、学生主催の歓迎パーティーを行った。3日目は大阪市内（道頓堀界限）の案内を行った後、KAIST側参加者を関西空港に見送った。

以下に、本シンポジウムを行って感じたことを3点ご報告したい。

①学生主導のシンポジウム

本シンポジウムは、双方の学生代表を中心に準備が進められた。プログラムの作成や交流活動の内容、会場運営や当日の役割分担など、海外からゲストを迎えて行うイベントを主催するという学生にとっては初めての経験であり、さらに自分自身の英語での口頭研究発表の準備もあり、ずいぶん苦労していたと思う。海外の目上の人と頻りにメールをやり取りし、参加者ごとにことなる事情に対応したりするなどただの参加者であったらできない経験である。今回ホスト役を務めた学生たちは相手の立場を慮って、主体的に物事を動かしていくというマネージメントを実によくこなしてくれており、本シンポジウムの開催は、彼らに大きな糧になったのではないかと思う。



阪大学生代表 上原了君

②英語での口頭発表

研究発表はすべて英語での口頭発表で行った、また座長も双方の学生が行う形式をとった。KAIST 側は幹細胞研究や疾病に関する細胞生物学的研究内容が多く、阪大側はより広範な生化学的、分子生物学的研究が目立った。どちらの研究も非常に高度な内容であったが、目的がしっかりと説明されており、予想以上に分かりやすくまとめられていた印象である。そのせいか二日間の長丁場であったにもかかわらず、会場の雰囲気はだれることなく予定の時間を超えて、非常に活発なデジスカッションが行われたことが印象的であった。学生にとってプレゼンテーションする機会は、授業や研究室内のセミナー等、比較的多くあるようで、きれいな図や動画を使ったパワーポイントを駆使することはそんなに難しいことではないようである。それが分野外の人に通じるように分かりやすくできるかどうか、英語でできるかどうかというのが、多くの学生の課題であると思っている。今回の学生の発表は、必ずしも流暢な英語で行われたわけではないが、苦しみながらも、韓国人（あるいは日本人）参加者に立派に通じることができた。この経験があれば、今後の英語口頭発表に自信を持ってのぞめるのではないかと思う。昨今、学生にとっては口頭発表の機会が減っているなかで、このような機会は貴重であると感じた。



研究発表会の様子



寝ている人は誰もいない！

③KAIST との交流意義

KAIST の教員や学生と話をする中で、欧米系や東南アジア系の学生、研究者と比べて、思った以上に韓国と日本は近い感覚を持っていると感じた。これは、単に東アジアという同じ文化圏に居ること以上に、非英語圏という環境、厳しい受験競争・就職問題、科学に対する価値観など、我々とよく似た社会的背景を背負っていることによるのではないかと思う。また、KAIST が実学志向の強いことも阪大工学部と似ているから余計にそう思ったのかもしれない。一方で、KAIST は、教育や研究のスタイルは米国のそれに近いもの adopting っており。大学院は博士課程のみで、授業は英語で行われる。学生は月額 7 万円程度の生活費支援を研究室と政府から受けており、経済的な負担は殆ど無い。卒業後は海外（おもに米国）でポスドクをすることを推奨されていて、多くの学生が卒業後は海外に活躍の場を求めていくという。多くの院生が修士で卒業し、国内企業に就職する我々からすれば、非常に刺激的な話であった。どちらがいいという話ではないが、異なるシステムを持つものの通しが交流することはお互いに刺激になる。かといって、あまりに異なる価値観の人間が交流しても意味がない。KAIST と阪大工学部の場合、研究レベルも、おかれた環境もよく似たものであるが、異なった研究教育システムを持っている者同士、互いに良い交流のパートナーであると言え、今後も本交流会を発展的に継続していくべきだと感じている。



金谷教授（阪大）と Kim 教授（KAIST）



白鶴酒造見学